

# William Faulkner in the 1940s: The Writer's Dilemma between the South and the United States of America

吉村, 幸

<https://hdl.handle.net/2324/4784374>

---

出版情報 : 九州大学, 2021, 博士 (文学), 課程博士  
バージョン :  
権利関係 :

氏 名 : 吉村 幸

論 文 名 : **William Faulkner in the 1940s: The Writer's Dilemma between the South and the United States of America**

(1940年代におけるウィリアム・フォークナーの創作活動の軌跡—国家と南部に揺れる作家の苦悩)

区 分 : 甲

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文はアメリカ南部作家 William Faulkner の 1940 年代の作品群を新たに解釈することで、当時の Faulkner が抱いていた葛藤の正体を明らかにすることを目的とする。これまでの Faulkner 研究では 1920 年代から 1930 年代の作品が中心に扱われてきた。また 1940 年代は先の年代と比べても作品数は少ない。しかし 1940 年代はアメリカが第二次世界大戦と冷戦を経験した時代であり、これらの戦争は当時の Faulkner に多大な影響を与えているのである。

1940 年代の作品群は第二次世界大戦中に高まった愛国主義に染まった作品として低く評されてきた。しかし Faulkner は国家への愛国主義的な感情とは相容れない、故郷であるアメリカ南部地域の特色や南北戦争の敗戦の歴史をも作品に描き出している。*The Hamlet* ではアメリカ北部から南部の町 Jefferson にやってきた Flem Snopes が南部人にイデオロギーの変化をもたらす。“The Bear” では南部の自然環境が北部資本の機械産業によって破壊されてしまう。あるいは“Shingles for the Lord”の南部人 Res Grier は合衆国政府が考案した公共事業の考え方に組したがために南部人のコミュニティに重大な被害をもたらしてしまう。このように北部の影響を受けて変化した南部を描き出してきた Faulkner だが、第二次世界大戦が勃発すると南部から世界へと意識が向いていく。“Delta Autumn”に描かれる南部人や海のイメージはその意識の変化を表している。まもなく真珠湾攻撃が起こりアメリカは第二次世界大戦へと参入するが、この出来事に際し Faulkner は兵隊に志願する南部の少年を描く“Two Soldiers”を書き上げる。このような少年には Faulkner の愛国主義的な感情が表出していると考えられるが、同時に Faulkner は作品に南部の特色あるいは北部との対立をも描き出している。また南部は *Intruder in the Dust* ではナチスドイツ、“Knight's Gambit”ではアルゼンチンに比較される。象徴的あるいは寓意的な解釈をすると、これらの二作品からはアメリカ南北戦争における南部の敗戦の歴史を読み解くことができ、国家の一致団結を図る愛国主義的な感情とは相容

れない。

南部の特色に加え、Faulknerは個人に重きを置く。“Shall Not Perish”の作品の最後において、Faulknerはアメリカの偉大さを称える中で国家を支える一個人を賞賛する。個人という点においてFaulknerはプライバシーを守ることにも重きを置いていた。“The Old People”に描かれる純血のアメリカ先住民Jobakerは誰にも素性を明かすことなく死んでいくが、このようなJobakerはFaulknerが希求するプライバシーを体現する人物であると解釈できる。“A Courtship”では後に先住民の酋長となるIkkemotubbeが経済的な理由に縛られず自由に創作活動をしたいという作者の個人的な願望の寓話的登場人物となる。このように作者の個人的な願望が作品に表れているという解釈は先行研究において見過ごされてきた。後にFaulknerは共産主義との闘いにおいて個人の存在が重要であると述べる。冷戦期においてソビエト連邦はアメリカに存在する人種問題を批判しており、アメリカ政府は人種問題の解決を南部に迫っていた。そのころに書かれた*Intruder in the Dust*は白人少年Charles Chick Malisonが黒人Lucas Beauchampの無実を証明するという点で人種問題の改善を示しているとも解釈されるが、同時にFaulknerはGavinの独白の中で人種問題に表れている南部の同質性について語り、南部をアメリカ国内における独自の存在とする。真珠湾攻撃の後日談が語られる“Knight’s Gambit”では、国籍をアルゼンチンからアメリカに変更したCaptain Gualdresにアメリカ国家への愛国的な感情を読み取ることもできるが、一方でGualdresは国を守ることも個人嗜好である馬に執着しており、愛国的な風潮に囚われない人物として描かれている。

このように1940年代のFaulknerの作品は第二次世界大戦と冷戦の影響を受けている。Faulknerはアメリカ国家を一つにする愛国的な感情を打ち出すと同時に、故郷である南部の独自性に執着しているのである。これが南部作家であるとともに、ノーベル文学賞受賞によってアメリカを代表する作家としても見られるようになったWilliam Faulknerが抱いていた葛藤の正体である。